## ビンラディン殺害と反米気運

パキスタンの苦悩とは。 後背地としてのアフガニスタンの重要性の板ばさみとなった、 アメリカが求める一テロとの戦い」と、 潜伏にはパキスタン軍の関与があったとされている **五月のビンラディン殺害の舞台となったパキスタン北西部** 

> 井上あえか 就実大学教授

代パキスタン分析』など。 実大学准教授などを経て現職。共著に『現 退学。在パキスタン大使館専門調査員、 東京大学大学院人文科学研究科単位取得 いのうえ あえか

で、この地域を経済的な低開発状態と、封建的な部族社会 独自の慣習法による自治を強く求めた結果であるが、一方 る。それは、パシュトゥーン人が中央による支配を嫌い、 この地域に干渉しない原則を継承してきたことによってい ギリス植民地期から独立後を通じて、一貫して中央政府が パキスタン政府の管轄の外にある。このような状況は、イ り、その中でも連邦直轄部族地域と呼ばれる地域は事実上 キスタン北西部はパシュトゥーン人の部族社会であ

のまま置き去りにすることにもなった。

## ハク時代に進んだイスラム国家化

化と政教分離主義を国是としてきた。それは建国の父ジン は、植民地からの独立以来、イスラム国家化を避け、近代 ウル・ハク陸軍参謀長(のち大統領)の時代に、政教分離 デタにより政権を取り、強力な軍事政権を確立したジアー が継承してきた原則でもあった。しかし、一九七七年のクー ナーの強い意向であったと同時に、政治的権威としての軍 部にこうした地域と人々を含むパキスタンという国家

によって、彼はクーデタという非合法的な手段によって成 治に深く関わる体制をつくることを自らの使命とすること 単にムスリムが住むというだけでなく、イスラム勢力が政 スタン建国の目的はイスラム国家樹立であると明言した。 立した自らの政権を正当化した。 の原則は大きな転機を迎える。ジアーウル・ハクは、 パ キ

ざまな局面においてイスラム主義勢力を温存してきた。そ なった。以来三○年あまりにわたって、パキスタンはさま き、イスラム勢力が明示的に政治的影響力をもつように をもたらした。彼の時代に軍とイスラム勢力は深く結びつ パキスタン、特にその軍とイスラム勢力に膨大な力と資金 力の温存は事実上継承されて今日に至った。 核心であるカシュミール政策として、重要な役割を果たし れはパキスタンの対アフガニスタン政策や対インド政策の カによるムジャヒディーン支援のための前線国家として、 てきた面をもつ。一進一退をくり返してきたように見える |民主化」の過程にあった一九九〇年代にも、 折しも、アフガニスタンにおける米ソの対立は、アメリ イスラム勢

し国内に深く根づかせてきた。表に出せないグレーな部分 過激派を育て、アメリカの関心がそれたのちもそれを継続 こうしてパキスタンはアメリカの支援によってイスラム

1)

せよとパキスタンに迫ったわけである。 メリカは今度はそのイスラム化政策を捨て、 タンはふたたびアメリカの最前線の同盟国となったが、 を多分に含みながらも、それは国益を守るための明 つの政策であったといえる。二〇〇一年九月以後、 パキス

## 米の軍事作戦に対する不満が鬱積

り、 反発と国内のイスラム過激派勢力に向かい合いつつ、アメ ラフは○八年に辞任するまで、 グループへの関与を深めた人物もいるといわれる。 かれ退役に追い込まれた軍幹部のなかには、イスラム過激 政党の連合体MMAが野党第二党へと躍進した。役職を解 二〇〇二年の下院選挙ではパキスタン史上初めてイスラム にさらされ、反動として世論はイスラム勢力支持に傾き、 た。しかし同時に、国内では急速な対米傾斜への強い批判 領内通過許可、領内でのパ米共同軍事作戦などを実行し 織の禁止やマドラサの登録制導入、アメリカ軍補! シャラフ大統領は、アメリカの要求に応えて協力政策をと カと協調することになった。 軍幹部の大幅な刷新をはじめ、 九九九年のクーデタで政権の座につい 対米追随政策に対する強 国内のイスラム主義組 てい た軍 給機 ムシャ 0

近での無人機を使った作戦がパキスタン政府、野党を含め 過程でもあったのである。近年ではアフガニスタン国境付 同時にパキスタン社会における反米感情がいっそう強まる 内でのテロ活動が活発化した。首都イスラマバードやパ タリバンと呼ばれる新たな勢力が生まれ、パキスタン国 被害が積み重なっていく。そのような中からパキスタン・ 戦が行われ、誤報あるいは作戦の失敗による誤爆や、 北西辺境州から州名変更)で、イスラム過激派の掃討作 隣接するハイバル・パフトゥンハー州(二○一○年四月に て強い反発を呼んでいた。それは、パキスタンの国土でア スタンのタリバン化への危惧が広がっていった。それは えてパキスタン国内各地にもテロの危険が拡大し、 ンジャーブ州の都市など、パシュトゥーン人の地域を越 合によってはやむを得ない結果として民間人の巻き添え この一〇年、アフガニスタン国境付近の部族地域および パキ 場

悪化の一途をたどっている。

## ビン・ラディン殺害にみるパ米関係の不和

たの

メリカが軍事作戦をくり返す状況が長期化していることへ

パキスタン社会の鬱積した怒りの表明のようでもあっ

二〇一一年五月二日、アボタバードの邸宅がアメリカ海

たはずのCIAとISIの不和が明るみに出たとみることの関係はなお不明ながら、対テロで緊密な協力関係にあっと画策したことは明らかである。ビンラディン殺害の件と

能性が高い。すでに悪化していたパ米関係は、以後さらに作戦が実行されたことはかつてなく、主権の侵害である可遂行されたという。パキスタン領内でアメリカ単独の軍事戦は、アメリカ単独で、パキスタン政府への事前通告なくウサマ・ビンラディンが殺害されたと報じられた。この作軍特殊部隊SEALSの急襲を受け、同所に潜伏していた軍特殊部隊SEALSの急襲を受け、同所に潜伏していた

この一件を、アメリカ当局が相当に強引に幕引きしようという手によれば総額二三〇万ドルを超えている。 大、被害者の二人はパキスタン軍情報部であるISI関係 ト、被害者の二人はパキスタン軍情報部であるISI関係 ト、被害者の二人はパキスタン軍情報部であるISI関係 ト、被害者の二人はパキスタン軍情報部であるISI関係 を当局に逮捕、起訴され、裁判を待つ身となったが、三 方子が、一転、釈放され帰国した。賠償額はパキスタンでの報道によれば総額二三〇万ドルを超えている。 この一件を、アメリカ当局が相当に強引に幕引きしよう の放棄を迫られ、

かなりの譲歩をしてきたという意識があ

SIが入っているという。界のテロ組織としてリストアップした三四の組織の中にI界のテロ組織としてリストアップした三四の組織の中にUウィキリークスの最近の暴露によれば、アメリカ政府が世は容易である。アメリカ側のパキスタンへの不信も大きい。

軍の街として知られるアボタバードが現場であったこと 軍の街として知られるアボタバードが現場であったこと 事の街として知られるアボタバードが現場であったこと 軍の街として知られるアボタバードが現場であったこと 事の街として知られるアボタバードが現場であったこと でことはありえないとみるべきであろう。

前の地域戦略(対インド、アフガン、カシュミールなど)パキスタンには、対テロ戦争という大義名分の下にそれ以口の対象となっていたわけではない。すでに述べたように口の対象となっていたわけではない。すでに述べたようにど、パキスタンの対外政策の目的との齟齬がここにある。ビンラディン抹殺が至上命令となっていたアメリカの思ビンラディン抹殺が至上命令となっていたアメリカの思

うした反米意識を温床として勢力を増し、内外の民主化圧、政策的に社会基盤を与えられたイスラム主義勢力は、そに政策的に社会基盤を与えられたイスラム主義勢力は、その場合で、ガギスを入り、アメリカにを含べる。一○年にわたる掃討作戦の過程で、パギスタン国民のる。一○年にわたる掃討作戦の過程で、パギスタン国民の

力と拮抗しているのが現状である。

現政権のザルダリ大統領とギラニ首相は民主化勢力に属 現政権のザルダリ大統領とギラニ首相は民主化勢力に属 を表こむ力はない。一方、軍にもまた今のところ、軍事力 でえこむ力はない。一方、軍にもまた今のところ、軍事力 に訴えて政権を奪う意志は見られない。パキスタンを取り に訴えて政権を奪う意志は見られない。パキスタンを取り をく国際環境の効果もあろうが、国内の政党政治がそれなりに奮闘していることは評価されよう。ISIのような、 水面下でさまざまな工作に手を染める勢力は今後も存続す るであろうが、むしろ民主化、政党政治の発展という観点 から、パキスタン政府に対する国際社会による支持、支援 から、パキスタン政府に対する国際社会による支持、支援 な不可欠である。

の勢力地図は変わりつつある。■としている。何が国益かという現実的な動機によって地域に対して、中国が急速に関係を深め強力な後ろ盾となろうに対して、中国が急速に関係を深め強力な後ろ盾となろう